

# 糸園和三郎（いとどのわさぶろう）

1911(明治44)年～2001(平成13)年

糸園和三郎は、中津市出身の洋画家です。呉服商の三男として生まれました。11歳のときに、骨髄炎にかかり学業を断念しますが、父の勧めで16歳で上京し、川端画学校に入学、絵を描き始めます。本格的に画家を目指すようになったのは20歳ごろです。戦中・戦後は疎開のために郷里中津ですごし、創作活動の傍ら子どもたちに絵を教えたり、美術クラブ「アヒル会」や中津文化連盟で絵の指導をしたりしています。1956年に中津を引き上げて再び上京すると、1957年にはサンパウロ・ビエンナーレに出品、同年の第4回日本国際美術展で佳作賞受賞、1968年には第8回現代日本美術展でK氏賞を受賞するなど評価は確固たるものとなってゆきます。現在、糸園の作品は、昭和を代表する画家の作品として多くの美術館に所蔵されています。

「子どもとサッカーボール」のように、彼の作品はどこか切なく、それでいてほのかな温かみを感じさせます。そこには、自らの大病や身近な人の死を乗り越えて獲得した深い精神性があらわれています。シュルレアリスムに影響を受けた独特の作風は難しくとらえられがちですが、自分の内面と対話し描きあげられた世界は多くの人々を魅了してやみません。



糸園和三郎写真